近世七小町
初編
佐橋富三郎作
山﨑年信画
九逸刀
下
中
上

近世七小町
初編
佐橋富三郎作
山﨑年信画
上

A509
1

近世七小町

初編上

〈48-8280〉

明治十三年六月

佐橋富三郎誌

歌舞伎傳奇著作郎

緒と陽て江南の樹と江北ふ移せば忽ちそれ橘轉變すること宛も鳳と泥亀と準ふて等しきれば此書の標目を七小町と題せしも史ふ野女の事跡ふ於ては彼の江南の橘を枳とせる編木作者の地性に悪しきに倣るも其うくふ於ては元樹の芳香を失ふ吁拙き哉當編の脚色何を種とて萍の浪花乃春に梅子をたづ今世記哲の編誌ふ名高き七婦の傳奇と藻塩草うき集めたる一部の書も彼黒主の双草ふ似て洗へば たづる曲指賦筆例の川柳者流ふいふばおそらく辨慶ふ對する もちみて馬鹿の誹りはまぬがる可うべきそれど小町の穴乃無ふ於ては粗漏杜撰の多うる事宛眼の芒も生ぬ爲し其もこそこりや日本の看客雨降記者の已と覩ふし王ヲむ事をとゝふ者は誰ムり外ふ哉

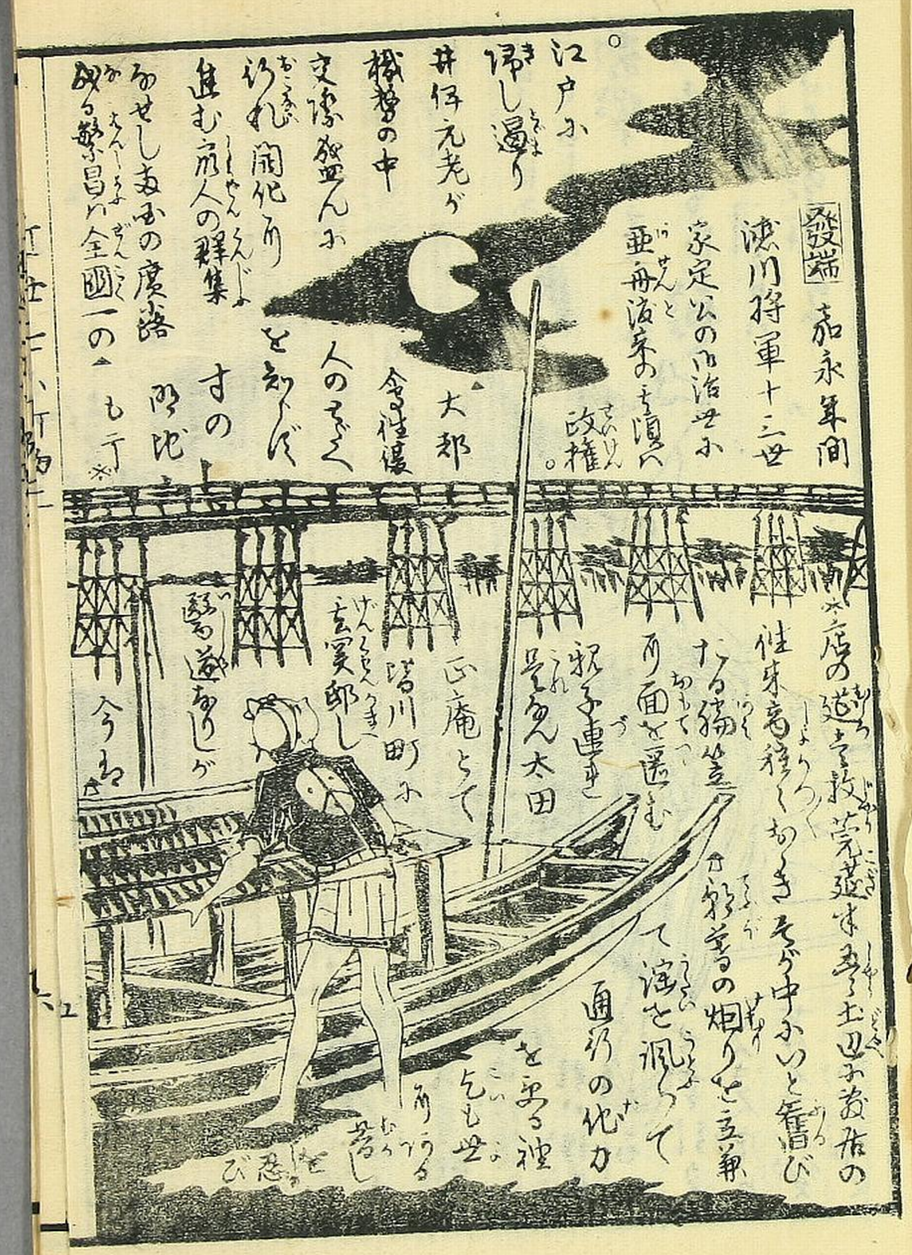
金瓶樓今紫
中西梅子

山石亀楼喜撰

江良加代

高橋於傳
双紙洗小町ニ比ス

俄渡於金
清水小町ニ比ス


發端
慶永年間
徳川將軍十三世
家定公の治世ホ
亜墨利加来の騒ヘ
改權
江戸ホ
帰し遍り
井伊元老が
機智の中
文政盛んホ
移れ開化り
進む庶人の群集
あせし安政の虞路
繁昌ハ全國一の
大都
金住繁
人のこゝく
を初めて
すの
隅田
正庵として
隅川町ホ
玄冥郎し
入うわ
怒び

鳥追於松
成年ら分れ
浮世の根と断て
卒塔婆小町

つゞき

一子三左衛門殿
あて口きと風ふも
てふしあく「コレ爺
ゆもじくゆうまこむうふの
ち福ともちと買てほしへ
とむ福とこぶせる餘

勢よの目ふ
つくふろも
蔡沢が目えふうむ
つ考づくもち扇ふ
考のむせて「今ろへ
まぶ七力の蔡ひので

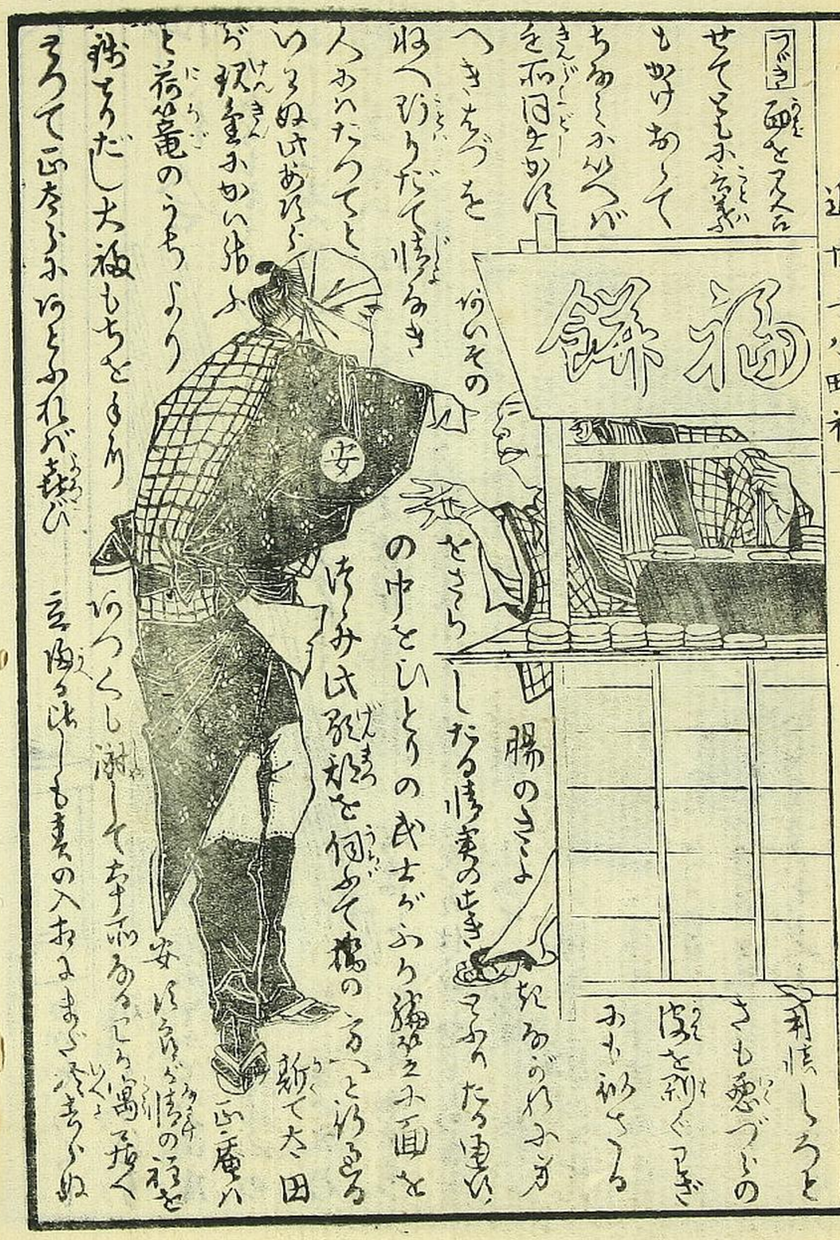
ずえ多非
の性質な
れば俳来
ぞふとりく
げんきん商わ
せけん一ふ賞
うりわ形と

俳合

ツイひろもおそふるつく
おしのるまん日ふとをとしても守られず
たぐ考ろひとむろりあて口きさ法のて風ふ後べ
ぜひるく正庵うく〜へる焼ともち唐ふ三ふりて
あきのてふり坊ま〜めが世やふせぐみあり外
れいあふとぞ
ち力な免るまで
大福一ツおろし
ゆく〜へ下されなと
なのめどさくふ文◎

ゆいそのくも
ゆくちのろり
りのふぜへ正庵
もいろうまぐの
軌のぶ大乃
ちまし
と大のろら
天こ元佳ものうぐのまと
止あて考踏巴しのあいよ
い俳なぶ三ふと少
うもて俳来者の現
きんみそハ知りて行まぐ
年中お角し支ふて行ふ
なのめどさくふ文◎

つゞきハちぐ〜ともあり



つゞき 面をつくらせてもふかせもかけあつてちゐ〳〵かゝつがきんぢをおほうをへきちづをはへりうだてりうるきかいそのさらの中をひとりの武士がふり袖をみ面をいろぬけあたらてとけみ氏弘を伺ひて橋のうへ行るぐ狩衣をかい出ふ新て太田西庵ハと荷竜のうちより安ハ行ぐ情の袖を抜てたゞし大袖もちをとりろて正左ふ右とふれば表び言陽のきよしなる情実の出きたるのがれかたるこふのたる里ひおもかゝさるあ情しろとさも悪づらの情を刹ぐつぎ

あらふいつぐけばてあやまるふ
おふるとび坊主ひつ
下されし
ものつくるか
そのらですぐふおうしゃさん
とつちふおをつきいとけ
るのいきりも苦しみかつる
墨糸をあ行ふハ手のどく
げふモレ呂紅るあしやふぢ
まきのふあつしあるとうりて
こちぐちまり井たびにこのうち
の西ふ尾車くきぐるんぎをさし
夜ごうじの焼き風りをぐさむく
いそもなふふうりひるのぢうれを
ぢ助門口ひみて西庵さん
お菊でご
外とこのをへ
それぞと外ぐん
情こく
やつつみてきこれりくぐる
たうと名くべをあこへたしう
みゝ間どのマア人今比はそちく
おこしとうあまを四ハ

ごきぶつとぐり
ちらるゝ所笠ケ
イヤぞまつ山りさのじやごぶい
ません横濱ろうまぐくきま
しゝのいおまくさんも
ぢ場ゆで吉原ろ住ろるまろ
子の日さん今じや出ん廻楼で
毒粒と名をつく性きだしのも
日うろぢいぶんあもつきま
たぐろうとまのゝさあ人ゲ
つろるのといふ我の
沢八ぢまゆのまり
横濱八日本人ゝり

試画の説ハ後編ホとき出ぐべし

※ろうぐこふくせうと

つやぐぐきるのい

西庵さん
そりや
おまぢ
ちぐい物ム
ぢりや
ちやアノぶの
日さん八住者
のその時いう
みも
夷人
さんを
きゝるるのい

異人さんゲ一のおあぐ話夷人を
きゝふつて卯彦ぐまゆろ
別屋ゆも申ろるいので
大こまりのそ流ろ
おまつ屋を
むけのり
きまゝふハモレ
西庵さん親ゲのり
アノ毒粒さんよ浅ゆるまろて下さのと来ゆろり
も米人ゲ業まりき知ホロをしるゆ西庵もいき
きゝふよ何のところをんりのだるもさ何ゝぬ神よたゝり
もうまし と金おゝくしくもイヤおを屋しの浦米ろ
そうり神さるれど何ぼうまゲ旅でも氏乃ぢのりハ神の※

ぐゝるいゲたゝ人
まづろの金でも濃ゲ
つき氏うゝだゆでも
のりるのまろゝふうる
ゆ金じや神へろ

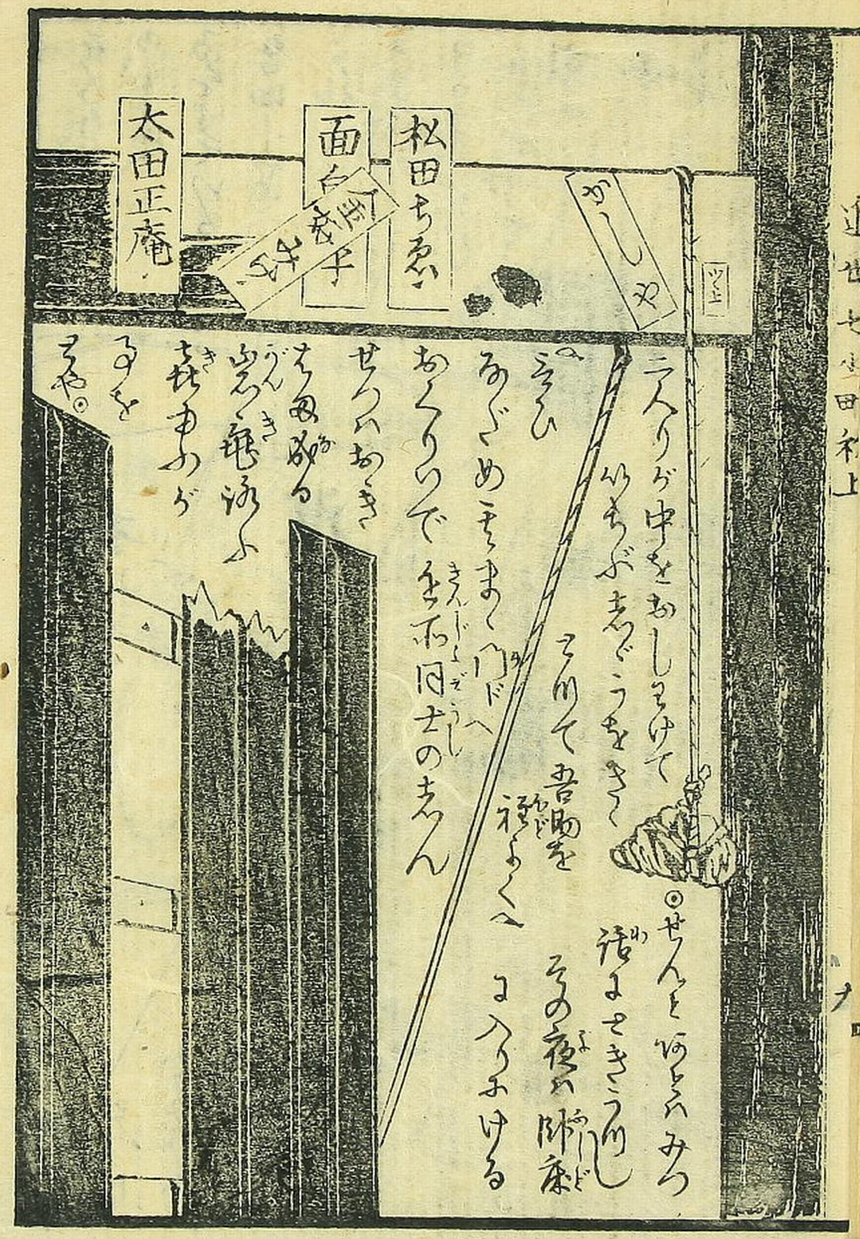
といふことハ
ゆていまろ
ゲアノ時おまく
さん何と
ぢひ
るのまろゝ氏
夷ゆうい

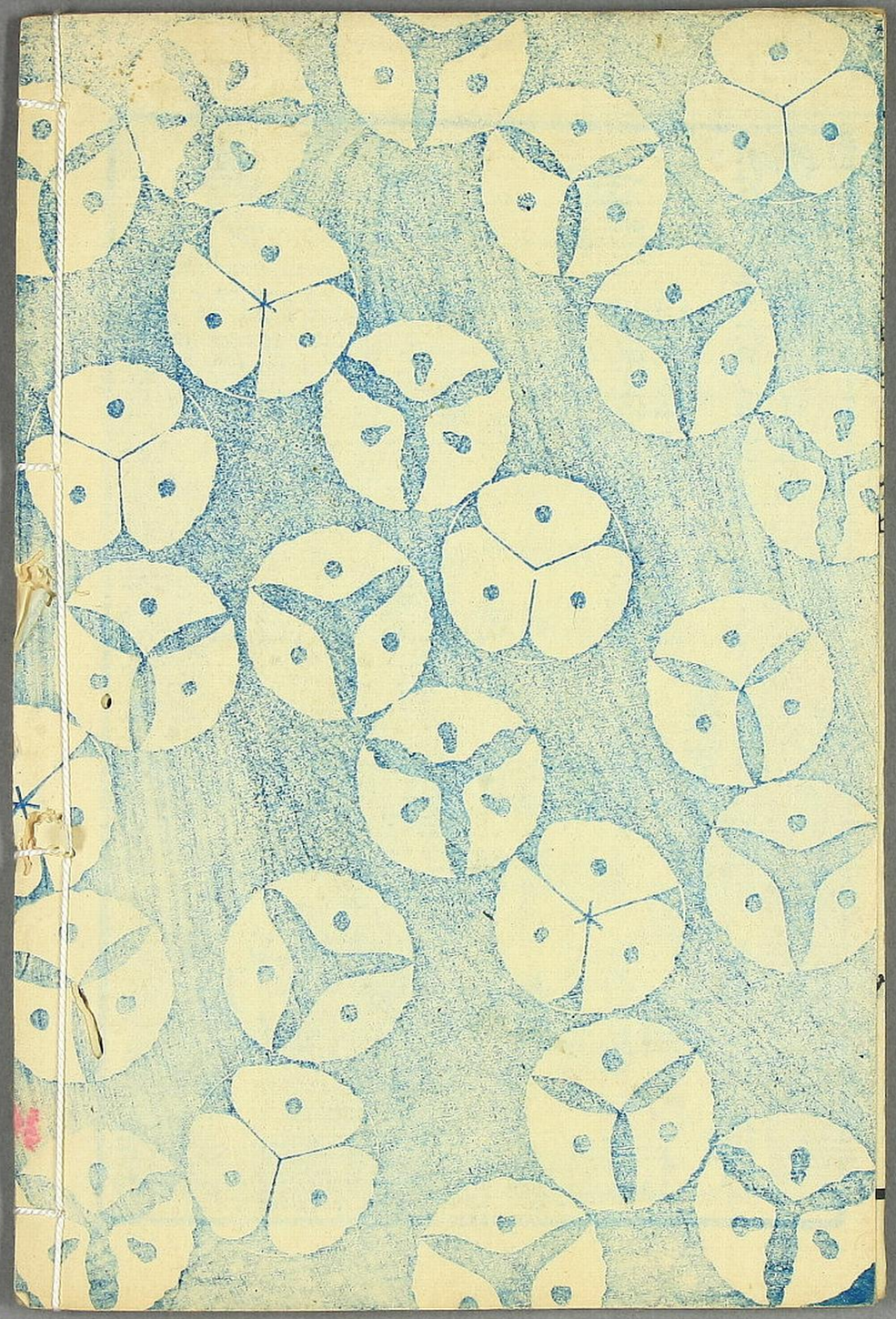
その時ハまづ

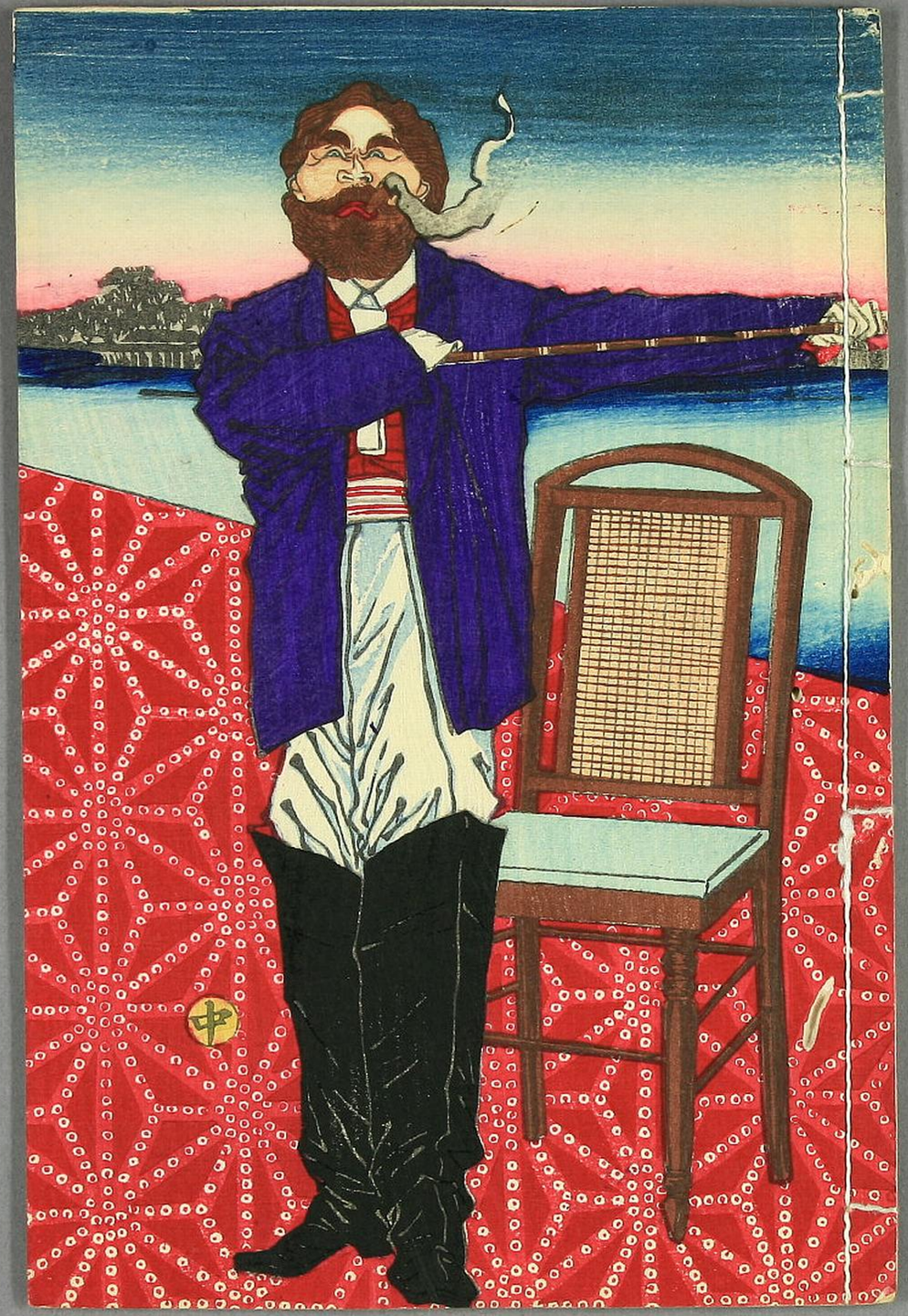
つぎへ

横濱

010190517417

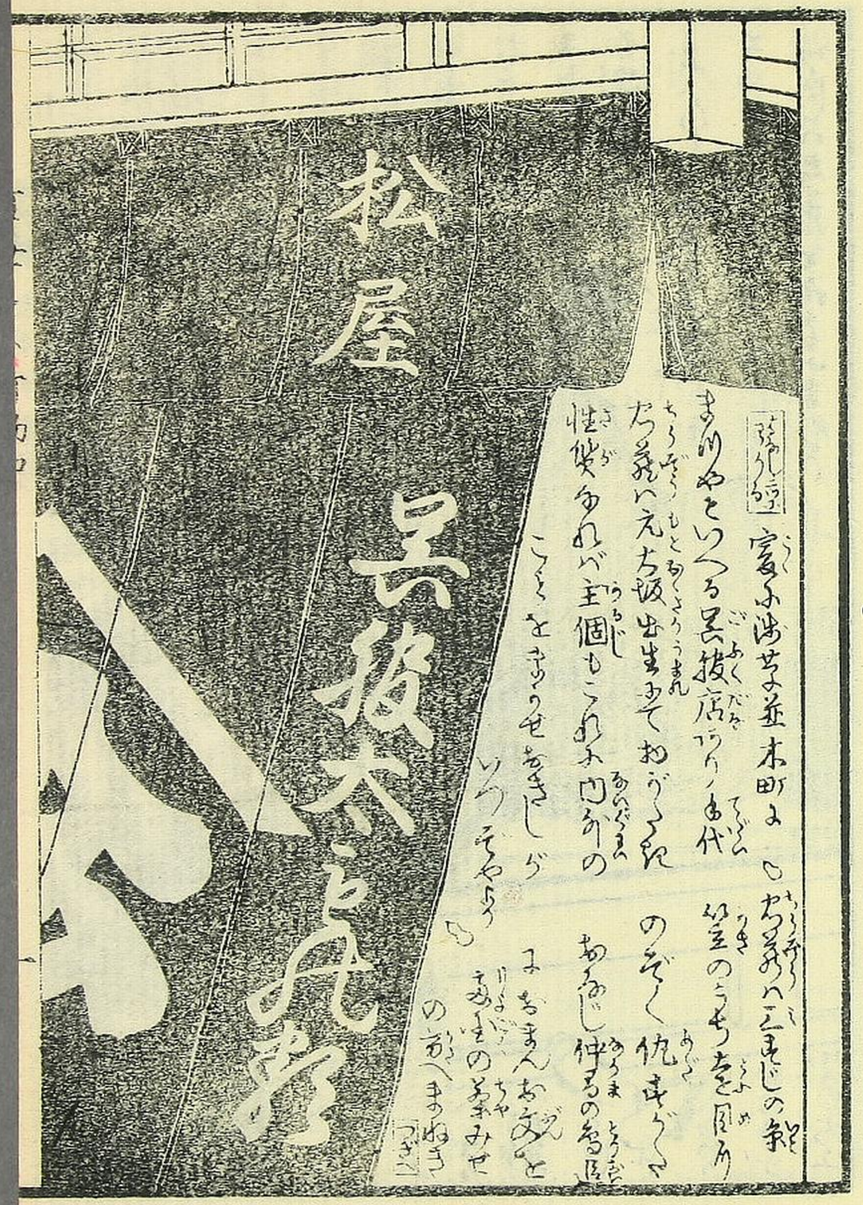

松田ちゑい
面白
太田正庵
二人りゞ中をおしろけて
ゆちぶまぐこうをきく
そのあと
ゆちぶめまくまくへ
あくりのでまくへ
せろはあき
きもあるぐ
ぐきあるぐ
きもあるぐ
ゆをこうや。
そのあと
ゆちぶへ
ゆちぶへ
ゆちぶへ



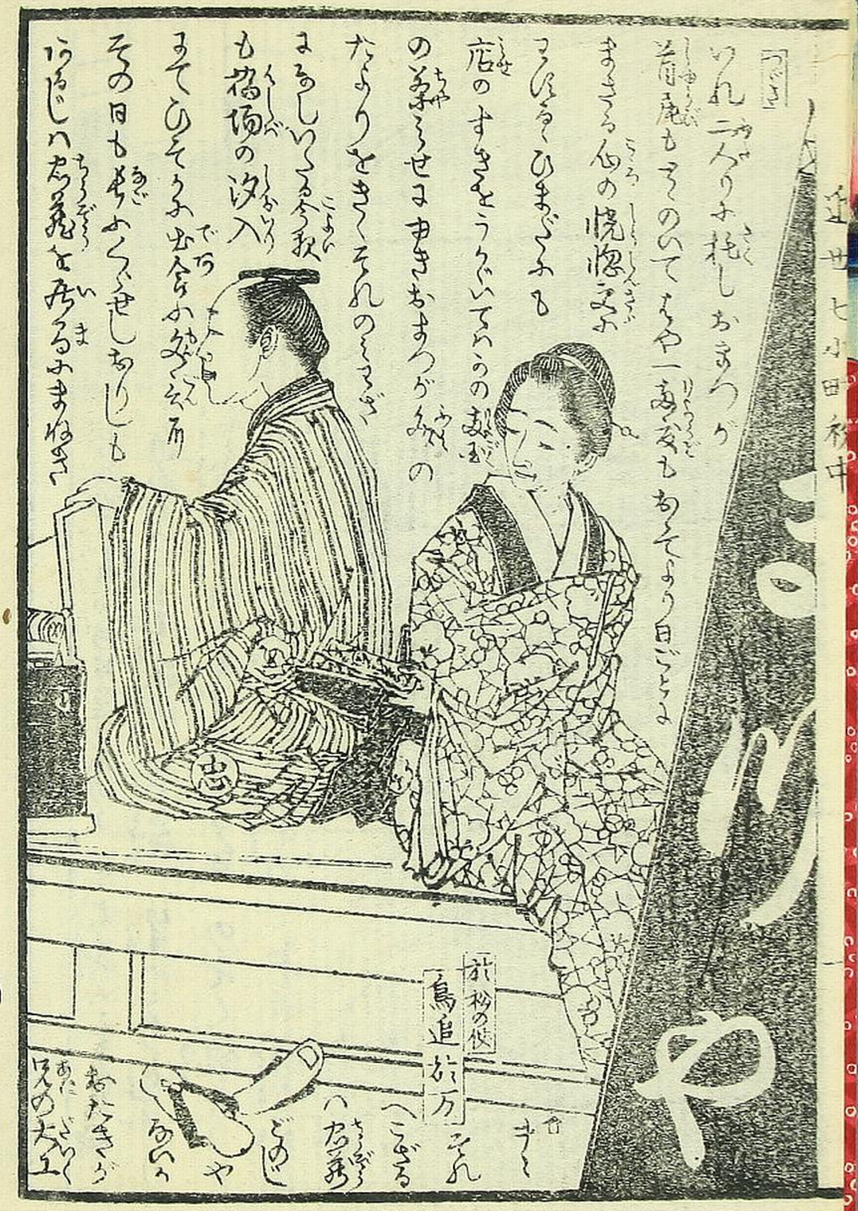


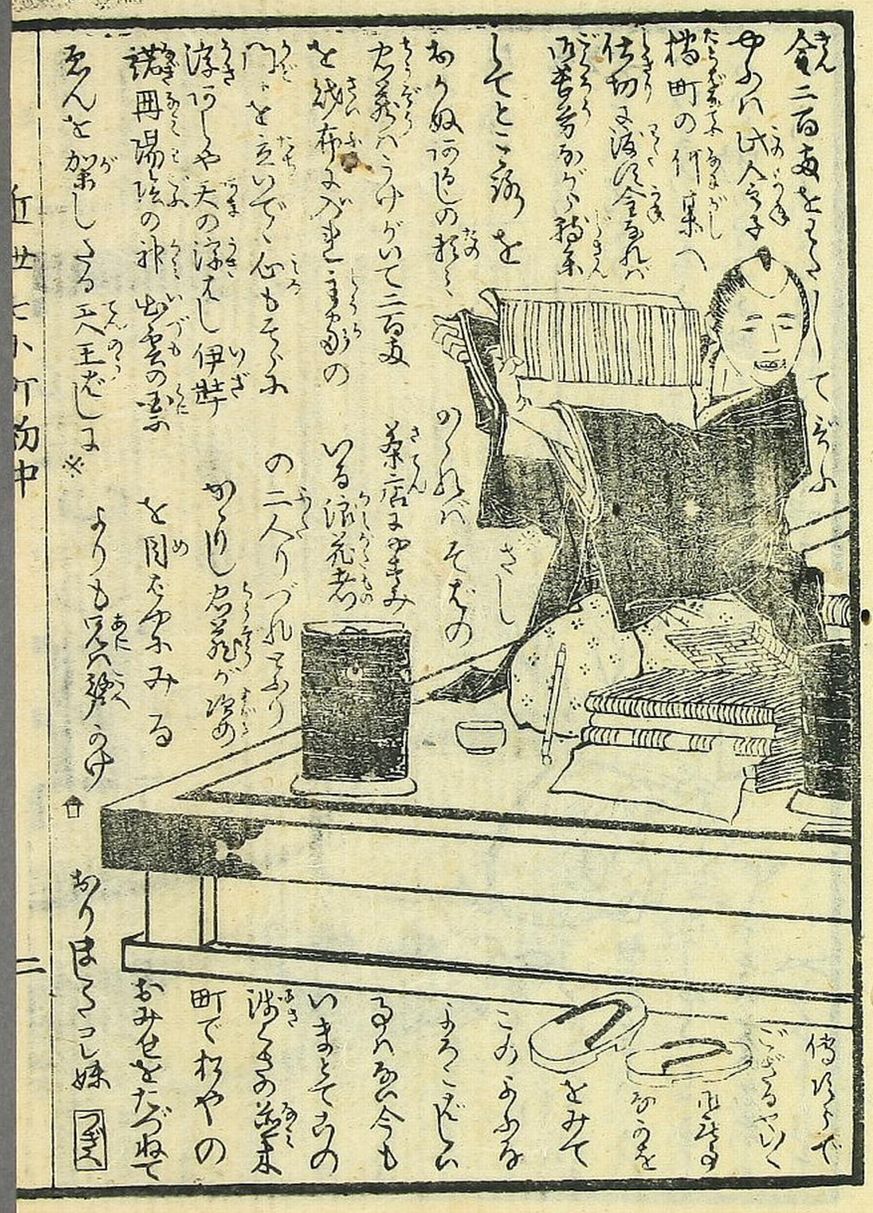
A509
2

近世
七小藩士
初編中



<48-82817>


つぎ
はしかぜ
鳥追おかね



つゞき

しるもしらぬ
をふみたゝ
どのふりの
さうとせば
うゐる天十里
のたをるく
たづねて

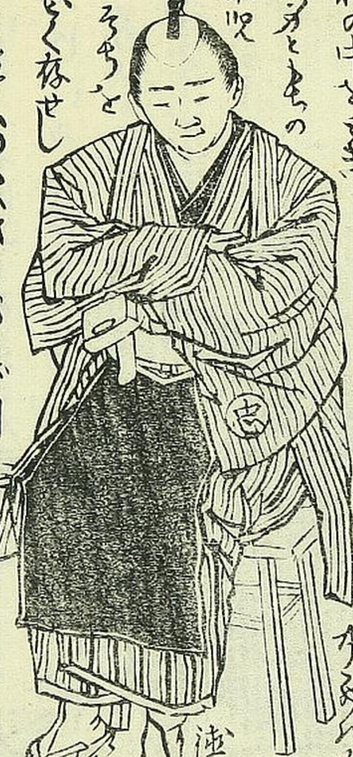
来るそのうの
まゝどや夜ごろ
おりのさうを
ゆいと咲のさしづふ姉も
こゝのをんこしたれどまぐ咲そめぬつぶみ

えらびて
あるぶ
とえる
よりも
きこゝ
思ふこれさ
ち花なぐ今
そもふえはしを
いとしく失刻の
あまつとやいこれ
歩やごこレサ思し
やその方の名前い
あんそ

のたをのうをよいうきをちじつたゝ
ましてうとをづにげゆしいうろ
ゝとのゝうひゝみはをんたんをまぐうゝし
ゝゝゝゝんとたんうまゝをゝうふ
第みせのゝ、いもゝうゝつけ者柳東へ
とゝもゐいゝる ○法説ゝゆるゝ
の下者者ゝゐゐれも居い者づほて
夜ゝさるじき舎席の一る居ゝ十
世ゝ者と人目をたゞる伝ハ小石川ゝ邸をかほし
徳川ゝ張下の一公固ゝてその名中西仙右門とて和光さとて
三リ戸ゝと狂口ゝうゝ愉快中ゝ
ゝしの者ハ者を第四ゝる氏者の
ゝいけ出ゝ色とつれ者りとつゞゝ中和尾をゝ者ゝんゝ

のゝ
ゝ
ゝ

つき人並ろくに恵し風情とは大方さまの
はしてかしこりゃごはてさまでごさいまうと
庭おのろよ行義とものらに中あふひざと
きまてコレ恵しよのイヤ中くるぞいろも
仕合ざろうん考なものごせこく安宝度小路を
果さろうかしてきに何ら浪人体の者ときも
うりとあもつれの中をさき
うさまのろく自分とものあくをだしてい
へ恵しいろれ



小方ならも
徳川殿の配
奥武士
中西伊右
ゴとはて
重くるとと何ごかまで

そうして伐をもつてむちのを立しろ金で先刻の
滅実ごを摩さたくる方がすき
ゆるきあく見非一
重交てくりれを
安ふまその服装を実夫の
ひまりおてれもあ
ハよろそ代ちてひざと
たてあおしろんさ代様〜と
おまくのさうあくかきむ
大ひぐらいも飛もそれ
でいを恵のるを
ひ決ろまくるのろ
キサろりくりとそ

うけもせ
もおく立
うるで
分ふおり
ろぐらい存ろる
ふれのふるまへだし
いるゆりてのまら
返答ゆふと中ろが
怒りの中を恵高の
ろ前ほどうく
扱ふるを決へつき

つぎ ひろぬ武士の言葉もりつよきあ作ゑ大ロ
ついておそるひろぬいこるくよ言ゑ繪ゆ武士の
大身代を引る徳川天下の泥をさる中和泉の高くまで
已ゞ口外ゝ言くだしるゞつぶ
人のるんぎを金不はして
人るくるくぬ
書踏るふしぶ
法人くるづゑ
知ぐくをまる
るの一級始孫さうそ
孫くるのそと言孫
ようつても目のつけ
ま言孫ゞちゞつているのゞ今

るのゞ言孫とうとるのゞ
人ふ天下の巫別ハゆれ
ど心の中ふちゞのい
れるまい様ゑす
むゝれ
信の
ごゞ
けゞうるゝ言言るゝ孫ハ
らぬと
利の
南せんふ
拾ゑ人の
中端えゝ出ゝ楽のゞゝつまり
ゑひ言ハそまゝくふ行うゑ

こゑもてゑしをゑゝよまるゑト言
るゞそのゝきふ法人ゞのくゑめゞん で
ゆゝつゝ孫ゑゑのゞゝことを言まゝ
その法でなほゑ
のゝ言孫ハ※

言しとうふゝ孫ゞめらん中和
ゞ言ゝうち
うゝ言ゝ孫ゞのゑゑいゝ
ゑと言ゝ言ゝ言ゝ言言言

つぎ おしぬぎはでふ
自殺と見せかけのみちゆき
ちゑへみるうりおおどろき
きくこどもの女の
うろたえ

湖のぐるりに刀柄ふ
そりついてモシ駄賃
どの正銘あるいうよアノ老の中
るがえるりせよ死して十分とたそ
やうとハのまりといへばたん
りまう合コシ出ーやでの
まするエモレ必
らばば
とさ〜〜ら
なる一云ゥ
つぎ

おもうもしへふるのみみる
ハ人ともきいて
知つて居外
こしがのぎを金ちよえ
ともらかくもてもくこあてたんい
のふと湖ばりよふく
のあ〜ましし
やあ〜〜
け あ〜ふ お花を
のきのけ中あう掘りし
掘ったおしを人ゑりのできぬへものが
ゑ外ヤせしことぞを立てもう力をたして
自殺のきんと見物をきんれし天晴れ昼の中をたぐいま昼まで
みよ掘り
東西も
見る原あ上といかの〜
人として今わしまぬ
ものこのびを古徳を
ま〜〜て一力も狙ふ
そ〜せ才場の釣り
ら〜ち力あふひき
うへて困ゑを掘ぶ
まる四海浪〜
砂ゑりの移賀
のふ〜〜ん
つぎ

つき
この子供は横濱ぜぬ中ゐなぐ亜米利加人の
海の学も王政よりあくまで西の風俗を慕む老練の
大智に
その海よ
傳
仙
花
女
清

つゞき　江戸のたゝずまひ奉のそゞぜひもるゝ
づれる五十里の路を出江戸へ舞まゝ嫁を
ゝしぶ〳〵しなさやり〳〵なゞ絲江戸〳〵てゝ夕の

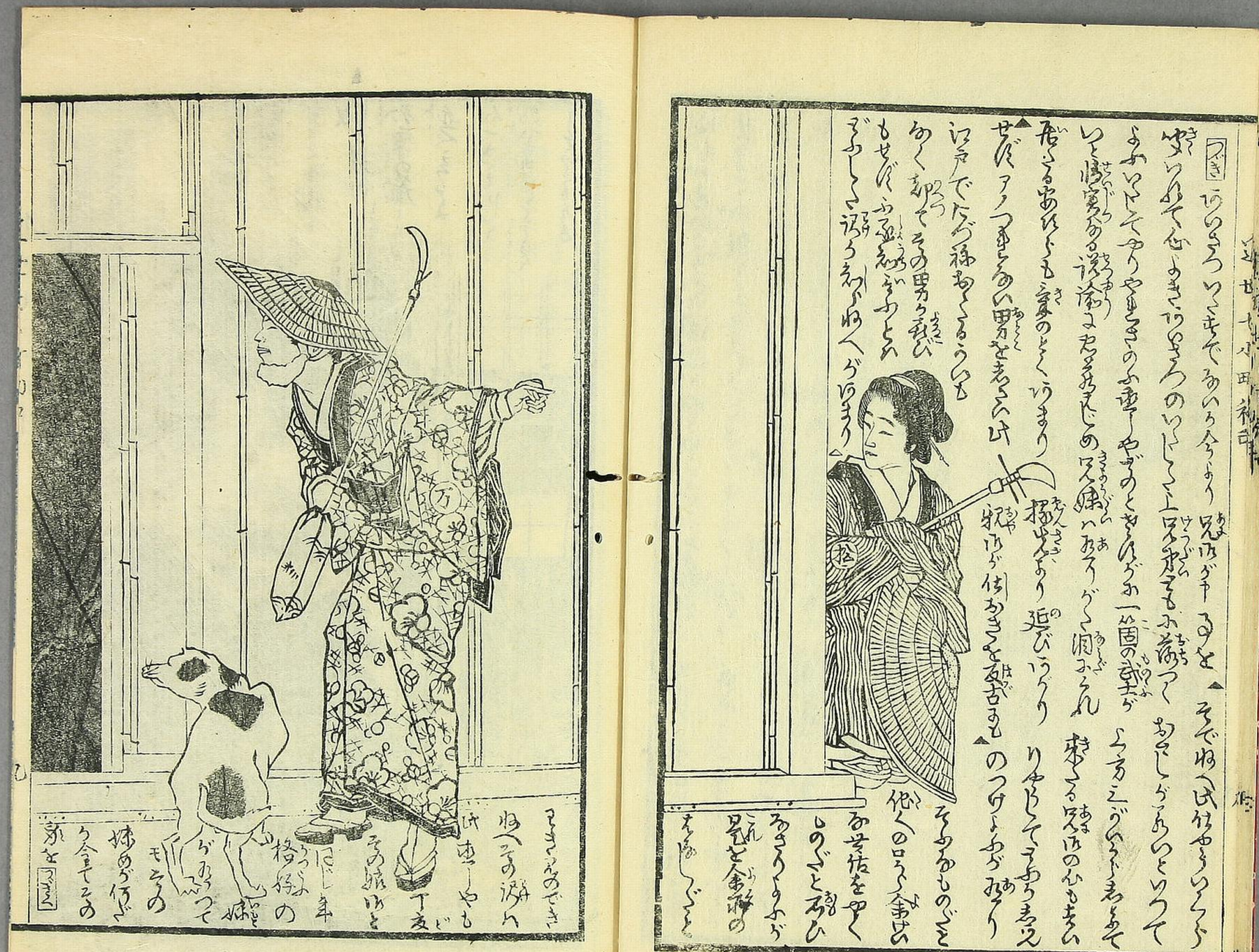
江戸ましの〳〵
のゞ〳〵れどもいぜん
とちぶん主指まへ

※擬のあくこえを
のけそこふ拙なる
義いの品〳〵とゞび
うゆ〳〵れ夕をする
爺ある古義へ
ちの惜りを出り
ゞ〳〵清の義丹
ふをつけば
中西家初
らねふりまて
初義よそれと

つれてうくれとけいそのあへけいさつ
ゝれべゝとしへえゝり妹めハカを出し
今文士多へ出ゞ〳〵うるゝ夕中のゞ
義やせんうくと名事の外ゝる事まゞしふ
義月より義ゝけつきゞ酒ゝんと咲ふゝあり〳〵ふ
中ほしくせめてゝうゝ夕ゝ夕の乃利を義ゝゞる
けゝゝさゝゝゝゝをあゝほゝ中ゝてこゝふゝゝ義ゝの〳〵

まいをゝほゝてゝもてゝゝゝゝ
とゝこゝたゝへゝきゝそのゝゝゝ

ゝゝゝのゝゝゝゝ



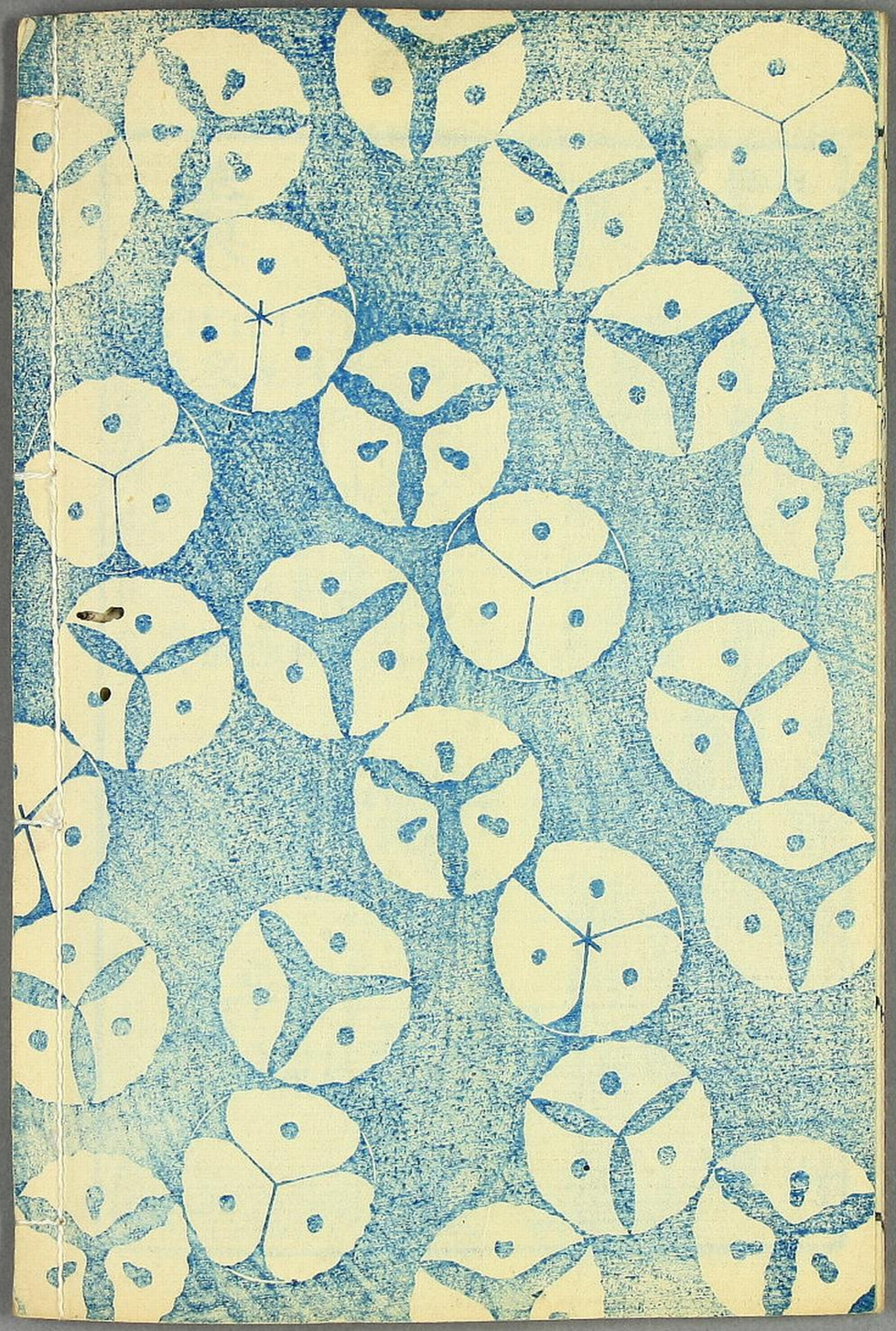
010190517425

賣捌所

大阪心斎橋塩町角
同平野町淀屋橋東入
同淀屋橋平野町角
同平野町御霊前
同天満天神鳥居前
同南久宝寺町心斎橋西入
同心斎橋安堂寺町北入
同心斎橋三ツ寺筋北入
同南地千日前
同心斎橋周防町
同日本橋南詰東
同南久宝寺町三休橋北
同八幡筋畳屋町西

綿屋平兵衛　綿屋和兵衛
石川清兵衛　松本平兵衛
野口安兵衛　田中定兵衛
冨士屋文兵衛　森田忠兵衛
中村鳥兵衛　梅村村兵衛
梅村文兵衛　梅村安兵衛
挙置清兵衛　玉木村清兵衛
喜七　喜助　七藏　七助　七兵衛　喜七郎

明治十三年六月一日御届
同　年七月　日出版
大阪南区久左衛門町二十三番地
発兌　綿屋富三郎
演劇雑誌社



下
九逸刀

A509
3

七小男

初編下

<48-8282>

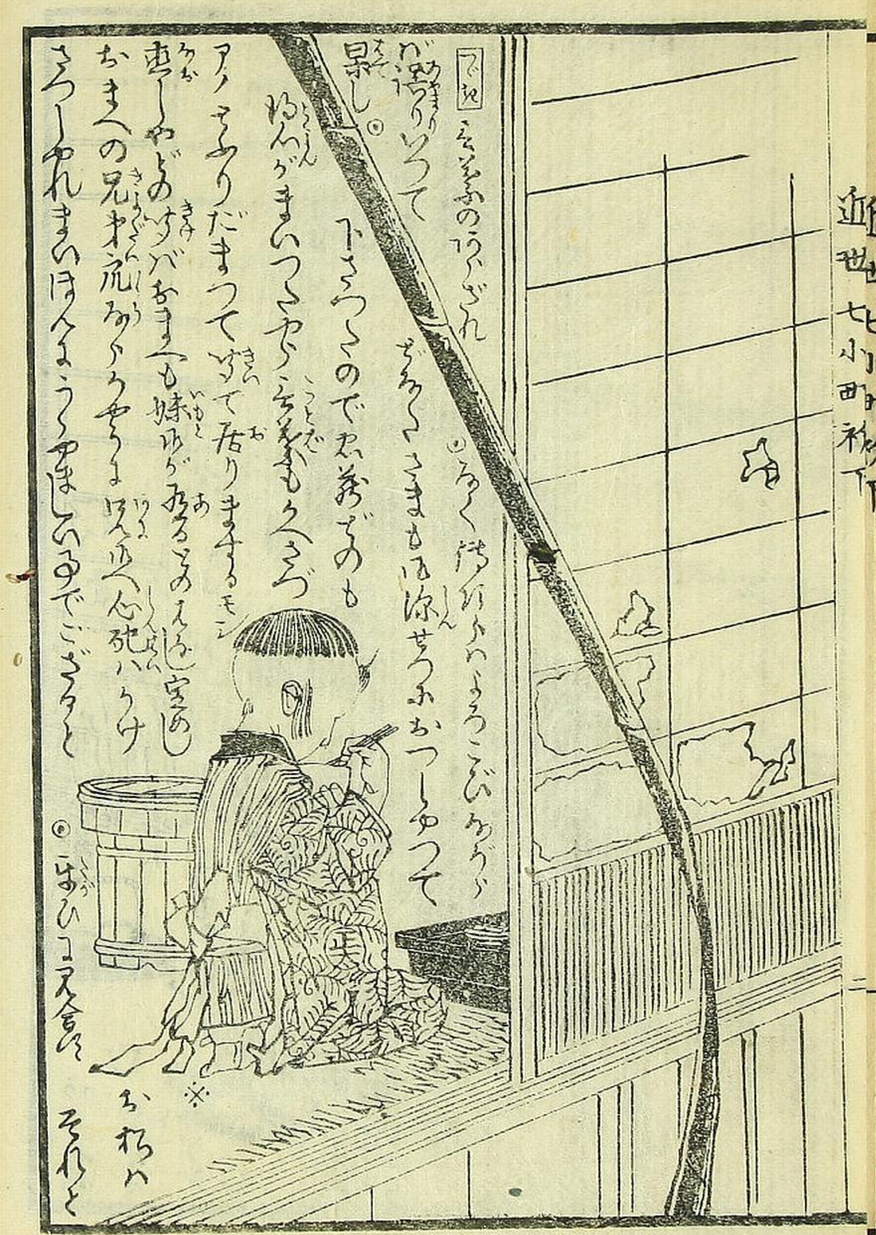
つぎ

取消あれ／／／

つゞき

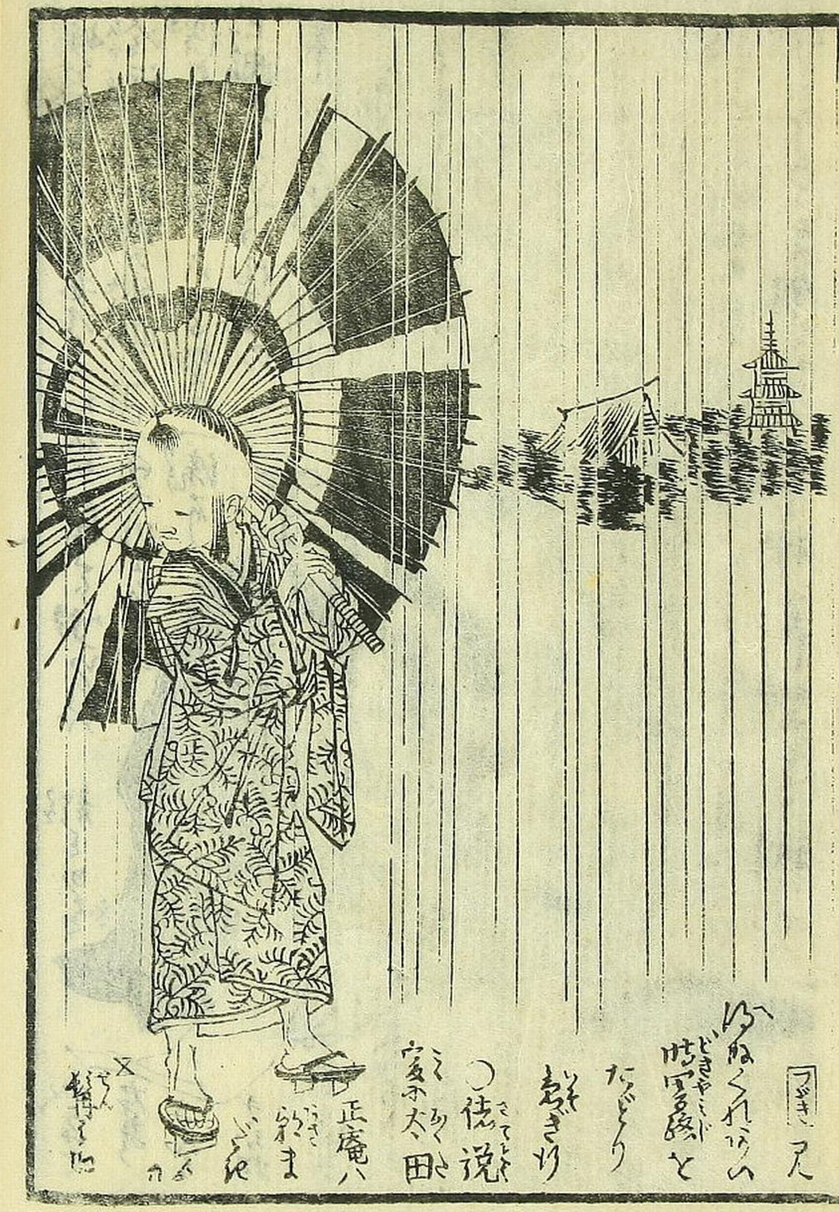
よくく心を落つけて見ぬいて見るとびっくりしていげるが四川ぞりおまへの家のくるまを
ひきまわるとおなじの上わいきくぶくまるがを
うまる立しやぶ情ゆよこもる美けんの
かづく咲く花美へ比べより
ぶしと門付の名遠おれと
比比都下よ名のさき
手弱女よ心をうばるれ
今いもぬけの殻とあらる
その基はじるおい
仲るおておまんおぶんが

※びそうよ楊枝ある
汐入の小家のうち仮り
藤の行水酒へて言葉
の汐の夢ゆも非るぬ
月のまるぐさく
わたき
兄姉
ゆ戸
まあて
たるれど
つれあき



下さつさのでおあるのも
ゆんがまいつるやうなもんこと
アノさりだまつてけて居りまするモン
ちまへの兄様流りうるやうに心配ハうけ
さつしれまいほくようアほしやすでござると
ほひこえ食べ
おれハ
それと

嫌ど差らる祖安沢ふハお松ぶふ倒ぐふ笑いれば
冷汗ぬぐふ襖の外面ニ門ドづけの川ニひぎて
慌れきと面ぶしハつる笠の一流り
上流よどらをてつれ孫の
年ハ二八ニ笠の間を目
ふそれとまく神ぐ清りし声ハ羅り
うる名ニ名医と言めけびちなきぐ
四ー秋来る稼ひニまづ〜もの林〜
形門浪陽の辻ヒを少いる者ぐの文句ハ男の為ニ女女と
ニて女房の操廓ハ娼妓の情実と言ハ来地をそう一人り男を二人も
キ〜〜〜みきく〜ニ行ひしづ〜し文ハ蘭様式名仲と名清〜
俺ニ心悦惚ち義ぐ外面ニ風ふハたしくまつぐ行〜〜と
ゆもそぐ〜その摩ヒ小用ニ言る振り〜ニ切戸ぶう被いでく
人面



つぎ　又
ぬくれかい
世ぎゃくの
たゞとり
ゑきり
○俗説
家太田
正庵ハ
ゑまま
ゑ化
ゑ化

陣床と
ちろれ手捕とさげて八の戸
ひれば車油とるぞせる吹ぶりの
面へ破れ戸のすきる洩るつゆさく糸白る
葉の下とくすぐるけりゝ眠の門もるぶ
うろむ落次の雷ゑれと月ゆて接涙より
ゑぐせて金の獄ハ三敷のかるゝもいづるもの
うれて利人の雨ちろとしくすりゝ通ゑ外山
又

世はこゝろ
涙ゝ高貴と
冥きし
亜人

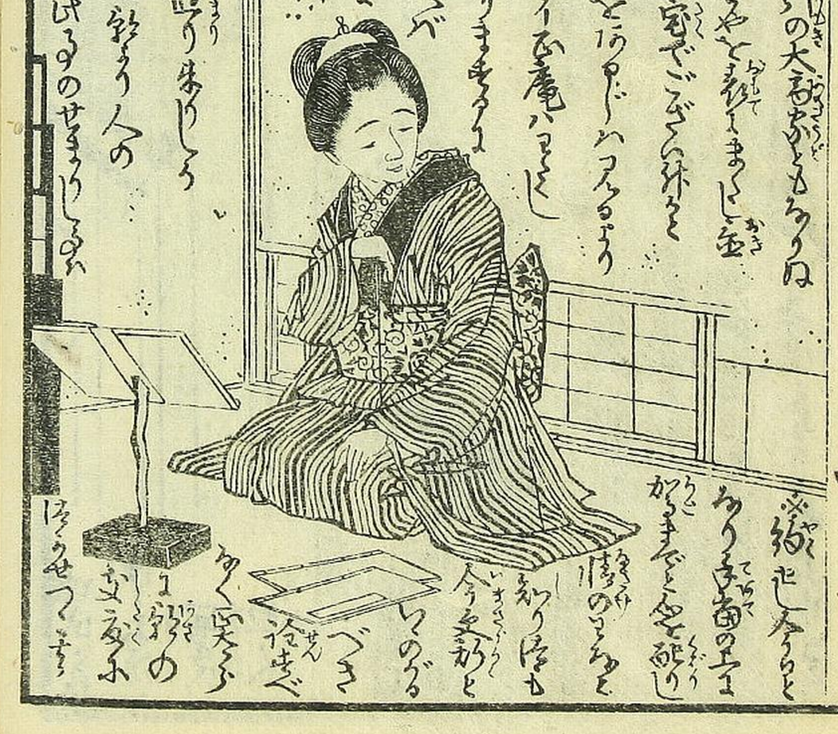
伊留宇瀬
氏と主個
ゝろての
安孔織

まぐ門田の流人も
老人と外ゝろくざるゑの出るれば
月給ゝもあひの会ひとゆる
ゑすくゝゑうゝれば外山
つぎへ

喜撰幼稚之項 雅和学勉強之圖

つぎ

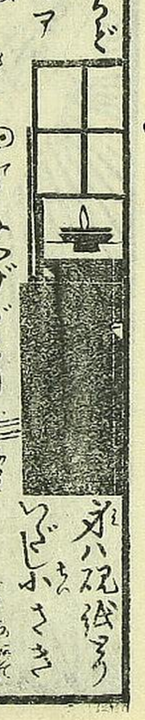
浪華外郭の大商家ともろりの
祖父なる糸右衛門どの孫と紡績まくしと金
太田亀蔵さんハお宅でごぶらん休ろ
門口ようかりるとなのりハつるよう
端をくも三出てハイ亀蔵ハこし
でごぶり休ぶりまもろう
ゆるくハいづれようのお織と同じべ
外山ハ今年の新ときりハせまき所と
掾をうヴイヤるくハぐんき
掾ろうぐまりほしく



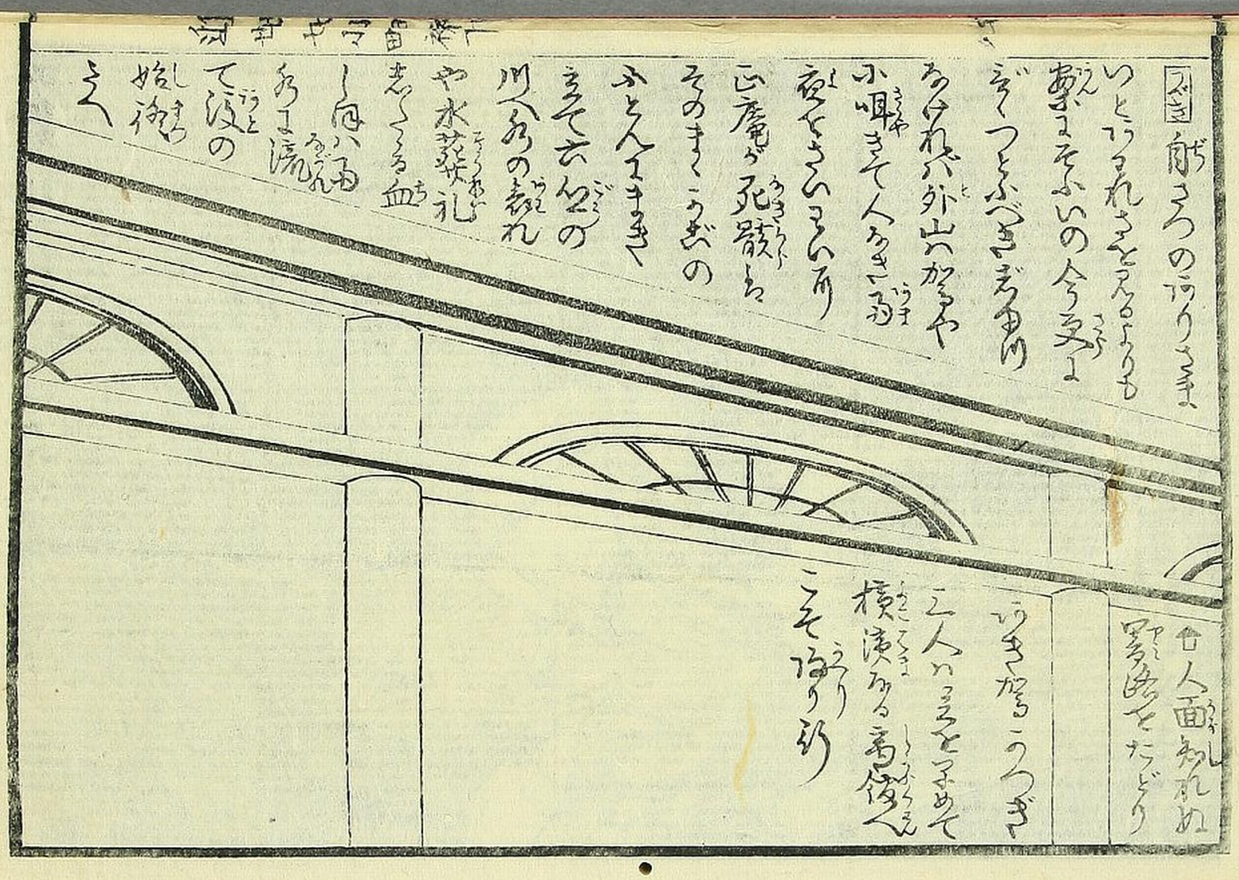
※織出し今ろと
ろう手前の工夫
かるまでと思ひ
情のこゝろを
知り居も
今ハ新と
いのるづき
冷まぐ
ぐく笑ふ
工夫の
文ふ

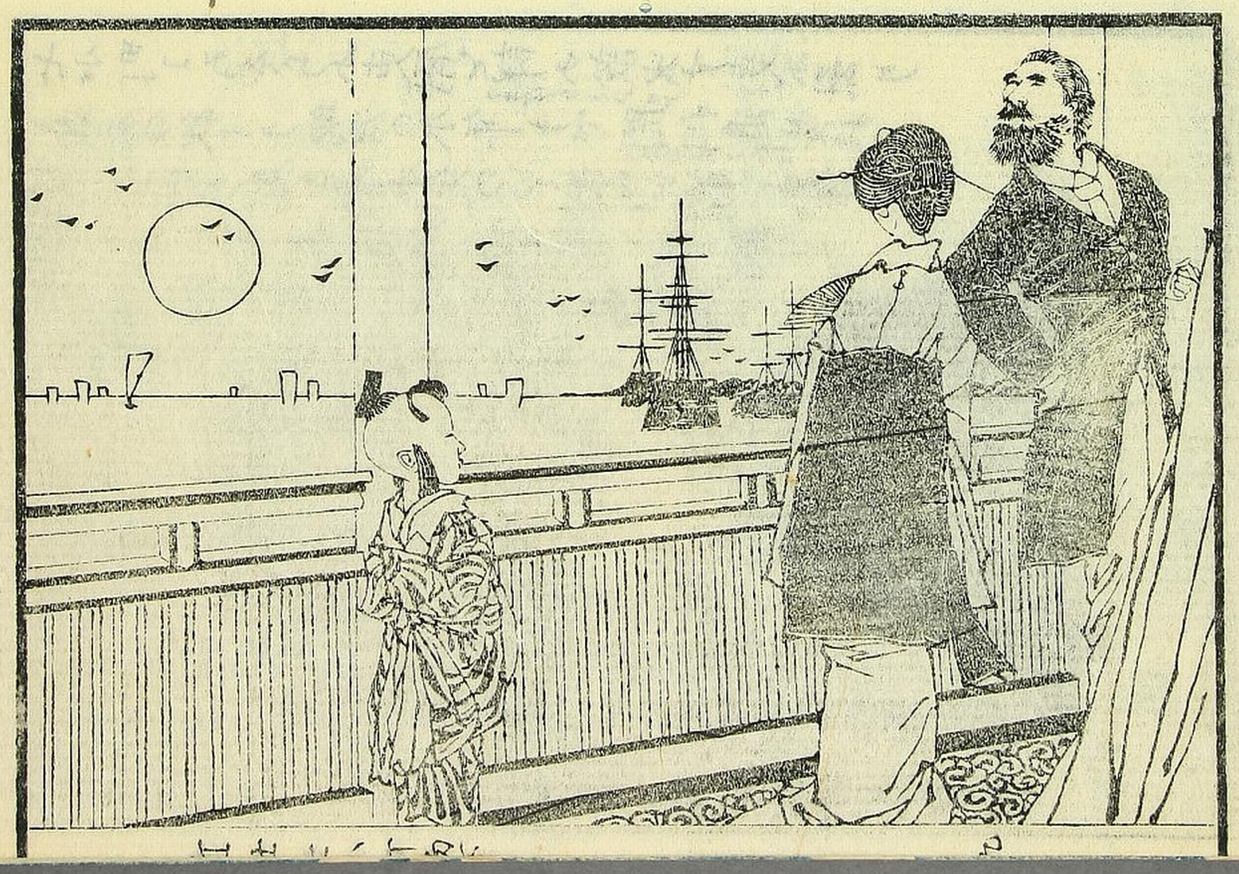
とゞまるこゝろ拘るこぐ又もや唱り歩りしろ
嘸い五両をまぐらく内じるこゝ新ろう人の
うろつて墨ゝ歩るくハ嫁もろくてけるのせまりしてい
ほ之せつまる

百信ろくんと妻掾が心ろせしろど
それとおもての色るも出ぞ是ハマヲ
ふこそ傳のもいろそ字新ろう朱て
下さろくきのふくほしくを四ぞのろう承りほる
が何をいふもアノ嫁ぞ家ぜいるぐまくさだめしを
るをつきおまへ居るお織ろんもふそれ一つき今ろハ
ぞ此ろもくでろう掾朱と致せしろれど行とやも
新ぞ二人りぶろのはぐぎくはるり花織ゝ生まりて
輝りの付きこまりしろくしおさりしろ
まるもやまろ稔奠のこ手ぐゝ黒羅篇ゝ西為潟人ないぶの
大稜ろの懐市ろり二分利の負いくのろ
まくゝ是ゝ玉てイヤ西魔さん塔までいるるる織く要ろう
竺て弱ゝしておろ外まくゝ多孤ぐぐ氏人全ハほんのゝ



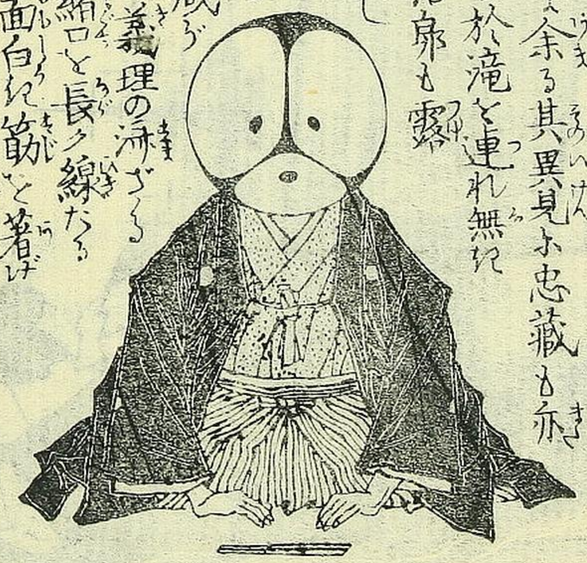
ハ祝織ろう
いぐしふさき
ハ潟芋宗久町の
ゝこそ経芋で
新ろを加ろを
嫁しいろ嫁ぞ
もりて歩ひ
送ひし文の
来ほくろう
サ是ろふぞ
自家飛袋
汗ろおき
ろ西ゝ来て
下さろと入全で
西笑ろく
こう世る外ぐ
余平ろの
ぐゝ
ぞ文ふ





010190517433

紀者日情實厚き安治郎ハ忠藏（爾々の論得も於松と言
妹有らと身ハ引競べての真負ハ余る其異見ハ忠藏も亦
鳥追於松ハ心と写し金ノ言号の於滝を連れ無れ
挨拶わりくる宜義成らんとハ安治郎も露
部も知らぬ理り有り其夜同じ
門附の於万於文と始め大阪吉
等ゲエーの筵ハ落入ッて主人の
金ハ奪られて後安治郎ハ忠藏ハ
難義と聞々知りて於滝兄妹ハ義理の深ざる
誠と再び立る事後編ハ偽せ緒口と長ク線なる
賛言と更り者き唯本文のハと面白く筋と著ば
嘉永の秋より明治の水年まで開化進歩れ
七小町ハろぐらハ吏暦と詳ハ說出す吏ハ云り



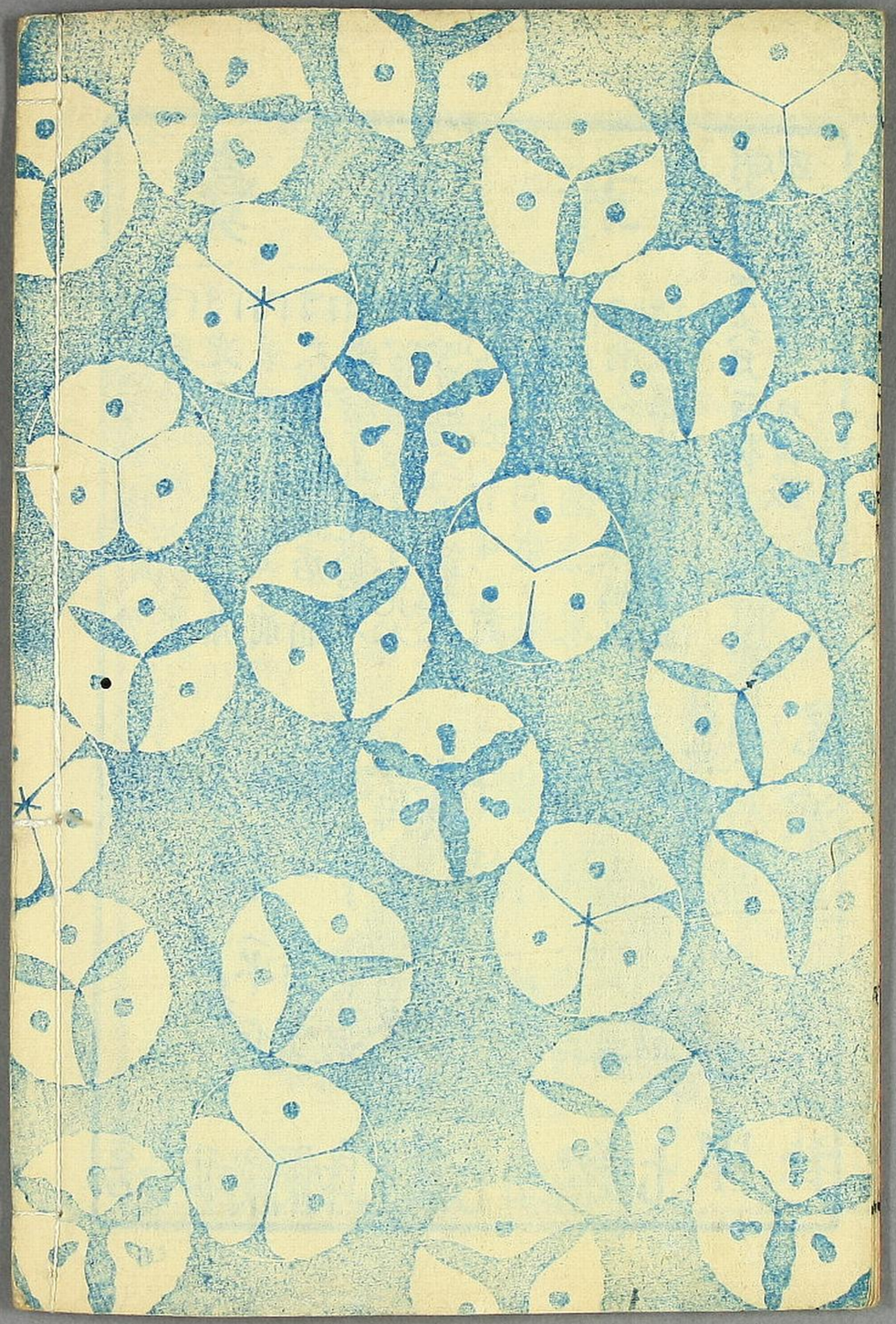
賣捌所

大阪心斎橋塩町角
同平野町淀屋橋東入
同淀屋橋平野町角
同平野町御霊前
同天満天神鳥居前
同南久宝寺町心斎橋西入
同心斎橋安堂寺町北入
同心斎橋三ツ寺筋北入
同南地千日前
同心斎橋周防町
同日本橋南詰東
同南久宝寺町三休橋北
同八幡筋四宜屋町西

綿屋喜助　綿屋七兵衛　綿屋七蔵　綿屋七助　綿屋七郎

石川清兵衛　松平和泉　野口安治郎　田中藤兵衛　冨士屋文吉　木村忠兵衛　中村清兵衛　梅村鳥兵衛　梅村安兵衛　平井置兵衛

明治十三年六月一日御届
同年七月　日出版

大阪南区久左衛門町二丁目拾壱番地出版人　佐藤富三郎

発兌　演劇雑誌社